
行き先は.....

唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行き先は……

【Nコード】

N2507B

【作者名】

唯

【あらすじ】

終電にギリギリで乗り込んだサラリーマン、知也。彼はいつもの電車との違いに段々と気付いていき……。一応ホラー小説のつもりです。

（前書き）

『警告』

グロテスクな部分も少しありますので、苦手な人は読まないでください。

いつものように電車に乗る。
いつものように終電ギリギリの――。

「疲れた」

椅子に腰を下ろして最初に出た言葉はそれだ。男は上を見てため息をついた。

彼の名は『秋野知也』^{あきのともや}。二十五歳のサラリーマンだ。

知也はカバンを椅子に置き、再度ため息をつく。

彼を乗せた電車は静かに走っていく。

持っていたコンビ二袋から弁当を取り出すと、知也は黙々と食べ始めた。大好きな「唐揚げ弁当」だ。

落ち着いたところで、周りを見渡してみる。彼の乗っている車両には人が一人も乗っていないかった。

いつも最低でも二、三人は乗っている。少し不思議に思ったが、こんな日もあるだろうと思い、箸で唐揚げをつまんだ。

弁当を食べ終わり、袋にゴミを入れて反対側の窓を見た。丁度トンネルなのだろう。真っ暗だった。

「……？ 長いな」

確かにトンネルにしては長い。その時知也の顔から血の気が一気に引いた。

（ちよつと待てよ、おい！ トンネルなんてねえだろ！）

嫌な感じがする。反射的に立ち上がった。車両を区切るドアの窓から隣の車両も見てみた。だがやはり人は誰も居なかった。

「何なんだよこれ……！？」

言いながらドアを開けた。古い電車なわけでも無いのに、ドアの軋む音が沈黙の中に響く。

知也は運転席のまん前まで行った。運転手はちゃんと座っている。それを見て少し安心した。

（荷物……）

フラフラと自分の元いた車両へと戻って荷物を持つと、また運転席の目の前まで行く。

すぐ近くの椅子に座った。

「……何怖がつてんだ……。もう二十五だぜ？　アホらしい……」
自分に言い聞かせるように言った。

ふと腕時計を見る。時間的にはもうそろそろ知也の降りる駅に着く頃だ。ドアの上の電光掲示板を見た。

「……あれ？」

文字が流れない。

（マジかよ……？　あれだな、故障だろ……）

一生懸命恐怖を笑い飛ばした。しかし掲示板に文字が流れることは無い。

「畜生、なんなんだよ！！？」

知也は運転席のドアをバンバン叩いた。だが運転手はずっと前を見ている。気付きもしていないようだ。

「馬鹿にしてんのか……？」

取っ手に手を掛け、ガチガチと動かす。

中から鍵が掛かっていて開きそうに無い。

「おい！　……おい！！　開けるよ、おい！」

再度ドアを激しく叩いた。

音を立てているはずなのに、運転手の耳には全く届いていない。知也は舌打ちすると、ドアを蹴り飛ばした。何度も何度も蹴る。じきにドアに窪みが出来た。更に何度か蹴るとドアが開いた。

だが運転手はこの音にすら見向きもしない。ズカズカと中に入り、運転手に声をかける。

「……………あの……………？」

すぐそばで言っているが、やはり気付かない。

「おい！ 馬鹿にしてんのかよ！？」

そう怒鳴って運転手の肩を引っ張った。ガクガクと動くだけだ。

「……………！！！」

知也は自分の手を見て驚いた。

血だらけだった――。

血は運転手の物のようだ。肩から血が滲んできていた。

「……………なあ……………、なあおい！ 血！ アンタ血い出てるぞ！？」

肩の血に触れないようにして腕を軽く引っ張る。ブチ、と音がし、運転手の腕がその場に落ちた。

「ひっ……………！」

腕からも肩からも血がドクドク流れ出る。知也はその場に座りこみたい衝動を抑え、とにかく運転席の部屋を出た。

（降りないと……………とにかく電車を降りないと……………）

ガタガタした足で懸命に歩く。

「無理だな」

後で声がした。まさか、と思いながらも振り向く。

「……………」

「怖いかな？」

運転手が前を向きながら喋っている。腕が外れていると言うのに、何事も無かったかのような口調だ。外見は若そうだが、声はかすれている。まるで老人が喋っているかのようなだった。

「……降ろせよ……」

やっとの思いで声を出した。寒さと恐怖で歯が音を立てている。

「無理だ」

「……なんなんだよ……？ この電車、一体なんなんだよ！？」

「静かに乗っていれば苦しまずに済んだものを……」

「え……うわっ！？」

急に電車が大きく傾いた。知也はその場に転倒し、体をドアに叩きつけられた。未だ電車とレールが音を立てている。

あまりの音に、知也は自分の耳を塞いだ。

「くそ……！」

片手で耳を塞ぎながら体を起こす。銀色に光る手すりを掴み、座席に倒れ込んだ。

「お前も死ぬぞ」

「……ふざけんなっ……」

運転手の背中を睨みつけた。

家では知也の妻が待っている。

（こんなところで死んでたまるか……）

反対側の椅子に置いてあるカバンを探る。しかし入っているのは会社の書類ばかりだ。

「畜生……！」

電車内を見回すと、荷物置き場に一つ黒いカバンが置かれていた。……？」

とりあえず降ろして中を見える。結構な重さがあった。手を中に突っ込んで探っていると、何か硬いものに当たった。取り出すと、それはレンチだった。

（ツイてるな……）

固唾を飲み、レンチを握り締めた。そつと運転手に近づく。
レンチを振り上げてもうすぐで当たるという時、手が知也の頭を
掴んだ。

「……！！？」

外れたはずの運転手の腕が捕まえていた。

腕は知也の体を宙に浮かせると、一気にフロントガラス顔を叩き
つけた。

案の定ガラスは割れ、知也は顔だけ外に出る。割れたガラスの破
片が顔に突き刺さり、悲鳴を上げた。

すぐに中に戻される。

床に転がされた知也は、自分の顔に刺さっている血だらけのガラ
スを取った。

「そんな物じゃ俺に傷一つ付けられないぞ」

運転手は嘲笑った。

そして今まで一度も動かなかった彼が、足を動かした。静かに立
ち上がり、ゆっくりと知也の方を向く。

顔は、後からの姿とは全く違い、シワまみれだった。

「……！！！」

運転手は片手を伸ばして知也に飛びかかった。その手は知也の首
をしっかりと掴み、放そうとしない。力は段々強くなっていく。

「……やめろ……！」

「言っただろう？ 静かに乗っていれば苦しまずに済んだ、と」
喋る運転手の腕を、知也は思い切り力を込めて掴んだ。彼は握力
はある方だ。しかし力は全く弱まらない。表情一つ変える事も無か
った。

（コイツ……さっきから痛感ねえのかよ……！？）

「効かないな」

更に力を強めた。親指が知也の喉に食い込む。とうとう声が出なくなり、息も出来なくなってきた。

（ヤベエ……息できねえ……！）

「美樹い……」

知也がかすれた声で言ったのは、家で待っている妻の名前だった。その名前を言った後、動くことはなかった。顔を横に向けて動かない知也を確認すると、運転手は立ち上がり、また運転席に座った。何事も無かったかのように口笛を吹きながら運転を続ける。

壁にぶつかる、と言うところでその電車はフツと消えた。

しかし次の瞬間にはまた同じ電車がレールの上を走っていた。運転席のドアも、荷物置き場に置かれた黒いカバンも、運転手の腕さえも元に戻った状態だった。

違うのは、もう知也の姿は無かった事、そして、運転手が少し若返ったように見えた事だ。

ドアが開き、一人の女性が乗り込んだ。
「良かったー。もう電車無いかと思った」

椅子に座る。

運転席からは、ちゃんとその姿が見えていた。

「今日は多いな……」

しゃがれた声で言いながら、不気味な笑いを見せた。

（後書き）

自分的にはホラーにしたつもりなのですが、どうでしたでしょうか？
ホラー好きさんには全然物足りないと思います^^；

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2507b/>

行き先は.....

2010年10月8日15時35分発行